



© Getty Images

スマイルノンフィクション

旬なトップアスリートにスポットを当てて、その奮闘ぶりに迫る「スマイルノンフィクション」。今回はテニス界のトッププレイヤーとして活躍を続ける錦織圭をクローズアップ。全豪オープンでは準々決勝で世界ランク1位のジョコビッチに敗れたものの、2016年の飛躍に期待を抱かせる戦いぶりだった。(文・秋山英宏)

※文中の記録は2016年2月4日現在。

KEI NISHIKORI

錦織 圭

トッププレイヤーとして勝負の1年

苦しんだ15年シーズン 最終戦で復調の兆しが見えた

2016年は、心に小さな不安をかかえての開幕だったのではないかと。昨年はやや不本意なシーズンとなった。ツアー3大会で優勝、1年を通して世界ランキング・トップ10を維持してきたが、全米オープンでの1回戦敗退から、シーズン末まで苦しい戦いが続いた。したがって、いかにスムーズなスタートを切れるかが、今シーズンの行方を占うと思われた。

15年シーズンの開幕当初、錦織は「今のランキング(世界ランク5位)には、まだ

慣れないというか、居心地がよくない」と話していた。チャレンジャーの立場から、世界ランク5位として挑戦を受ける立場へと転換し、その居心地の悪さと戦う1年になった。

世界ランキングは過去52週の成績で算出されるため、好成績を取っても1年後にはそのランキングポイントが失効し、あらためてゼロから積み上げなくては地位を守れない。これをディフェンドする(守る)ことが、選手には大きな負担となる。錦織は昨年2月、ブログにこんなことを書いている。

〈よく考えてみればディフェンドするとか

しないとかどうでもいいことで、テニスの場合は今年1年の成績で最後のランキングが決まるので去年の成績に固執することはないんだっていうのにやっとな最近気づきました)

ポイントの増減に一喜一憂するより“足し算思考”でどこまで積み上げられるか、と頭を切り換えたのだ。とはいえ実際に目減りしていくポイントもあり、ディフェンドを頭から閉め出すのは難しかったはずだ。しかも、実力のある選手たちが、錦織を蹴落とし、代わって自分がのし上がろうと牙を剥いてくる。昨年10月、中国・上海大会での記者会見で、「心身の疲れ、スタミナの消耗はあったか?」という質問に錦織は以下のように答えている。

「あるような、ないような。(シーズン)後半になるにつれて、疲れも溜まってくる。疲れは体もメンタル的にもあるが、残り少ない試合数なので大丈夫だと思います」

疲労からくる集中力の低下は明らかだった。だから、『これを取れば』という大事な1ポイントを逃し、苦境に足を踏み入れることが多かった。試合での表情やコメントから、執着心を失っている様子もかいま見られた。

男子テニス界に君臨するのはBIG4と呼ばれるノバク・ジョコビッチ(セルビア)、ロジャー・フェデラー(スイス)、ラファエル・ナダル(スペイン)、アンディ・マレー(イギリス)。彼らに体格やパワーで劣る錦織の最大の武器は、類い希な集中力だ。松岡修造氏(元テニスプレイヤー)はテレビ解説で「スーパー・ゾーン」という言葉を使った。ゾーンとは、集中力が極限まで高まり自然に体が動く状態を指す。集中力が雑念を払いのけ、強敵に挑む恐怖心を打ち消すのだ。だが、15年シーズン終盤戦の錦織は、その武器が鈍くなっていた。

15年シーズンの最終戦、ATPワールドツアー・ファイナルズで、ようやく復調の兆しが見られた。

フェデラーに挑んだ1次リーグ第3戦、錦織はこのレジェンドを果敢に攻めた。ベースラインの内側に侵入し、早いタイミングでグラウンドストロークを放った。不調時は攻めが単調になっていたが、この試合ではコースや球種を組み合わせ、自分の展開を作った。試合には敗れたとはいえ、集中力と思考力がよく働いていることが読みとれた。

試合後、筆者が一番聞きたかった言葉が彼の口から出た。

「内容も思い出せないくらい集中していた



◀世界中のファンを魅了するトッププレイヤーとなった錦織

と思う」

選手は一つのきっかけで変わることがある。シーズン最終戦は新しい年への架け橋となる大会でもある。その大会で、好転の兆しが見られたことは、シーズンオフに入る彼の気持ちを明るくしたに違いない。

「自分らしいテニスを取り戻せたのは大きい。満足はある。いいテニスができていたので、自信を落とさず、来年持ちこたえられるかなと思う」

そう言って錦織は苦闘のシーズンを終えた。ただ、低迷にピリオドを打ったと断言するには、もう少し様子を見なければならぬ。V字回復となるかは、16年シーズンの滑り出しにかかっているはずだった。揺らぎつつあった自信は「持ちこたえられるかな」というところまで回復した。それを確固たるものにしなければならない。

全豪オープン準々決勝進出を果たすも世界ランク1位ジョコビッチに敗れる

シーズン開幕戦のブリスベン国際は、準々決勝で新鋭バーナード・トミック（オーストラリア）に敗れた。躍進が期待される若者だが、これまで敗れたことのない世界ランク18位に喫した黒星は、全豪オープンに向けての不安要素の一つになったはずだ。

1月18日、シーズン最初の四大大会、全豪オープンが開幕した。確たる自信は戻ったか、頭をもたげようとする不安をラケットで吹き払うことができるのか、その出足が目目された。

1回戦の相手はフィリップ・コールシュライバー（ドイツ）、自己最高ランク16位の強敵だった。開幕前の会見で「タフな1回戦になる」と話した錦織だったが、終わってみれば3セット連取の快勝。昨季の終盤戦では大事な1本が取れずに苦労したが、この試合では相手のサービスゲームを4度ブレイクする勝負強さを見せた。「このスコアで勝てるとは思っていなかった

た。強くてリスペクトできる相手だったので、集中していた」

好スタートが錦織の背中への荷を軽くしたに違いない。2回戦もストレート勝ちを収め、続く3回戦では第26シードのギジェルモ・ガルシア・ロペス（スペイン）を4セットで振り切り、全豪オープンでは5年連続となるベスト16入りを決めた。4回戦では第9シードの強敵、ジョーウィルフライ・ツォンガ（フランス）を6-4、6-2、6-4と圧倒した。昨年の全仏オープンでは地元の大応援を受け苦戦した相手にリベンジを果たした。「自信を持って打っていった。守り（のショット）も深く入った」

会心の勝利だった。相手のバックハンドを中心に深いボールで攻め、大胆かつ正確なバックハンドのダウンザライン（ストレート）などでとどめを刺した。

快調に2年連続準々決勝進出を果たしたが、初の全豪オープン4強入りはジョコビッチに阻まれた。この大会で全豪オープン歴代最多タイの6度目の優勝を飾った絶対王者はやはり手強かった。錦織は「焦りがあった。相手は関係なく、自分のミスばかりだった」と悔やんだ。

より厳しいボールを打たなければ、自分から先に仕掛けなければと、はやる気持ちがミスにつながった。相手の返球の厳しさにミスを強いられる場面も少なくなかった。本人の言葉と矛盾するが、ジョコビッチに“させられた”ミスが、一方的な試合展開につながったと思えてならない。

ジョコビッチ優位の状況でも、錦織は攻撃を執拗に繰り出した。早めの仕掛けでミスが増えて第1、第2セットを失うと、じっくり丁寧に攻める戦術に切り替え、勝機を探った。打つべき手は打った。その抵抗に、彼の復調ぶりが確信できた。

「もうちょっと何かできただろうし、自分の力を全部は出せていなかったと思う。ちょっとふがいない」

試合直後の錦織の口の中には苦い味しかなかったようだ。しかし、苦い表情が彼に執着心が戻ったことを物語っていた。少なくとも挑戦者として、やるべきことはやった。そして、スコアほど悪い試合ではなかった。

錦織自身、復調の手応えは確かなものになったはずだ。2016年は真価が問われる。トップ10プレーヤーとして迎える2シーズン目。目標としてきた四大大会での決勝進出、マスターズ1000グレードでの優勝、さらにリオ五輪ではメダル獲得の期待も高まる。

14年全米オープンから16年全豪オープンまでの6大会のうち4大会で8強以上は、トップ10プレーヤーとして少しも恥ずかしくない成績だ。噛み合えば準決勝、決勝進出も期待できる。

大会の序盤で下位選手の挑戦を無難に退けて体力を温存、無傷で大会の後半戦を迎えられたら。現在の7位を維持して四大大会で第8シードまでに入り、上位4選手と対戦することなく準々決勝に進出できれば。そして、成功体験を増やし、確かな自信を胸にBIG4との対戦が迎えられるば、夢は現実のものになる。

昨シーズンの苦闘の経験はプラスにはなってもマイナス要素になることはないだろう。トッププレーヤーとしての経験値を増した錦織。26歳は勝負の年になる。



PROFILE

錦織圭（にしきり・けい）

1989年12月29日生、島根県出身。5歳からテニスを始め、2001年に全国選抜ジュニア、全国小学生大会、全日本ジュニア12歳以下で優勝し、全国制覇3冠を達成。2007年10月にプロ転向。2008年2月、デルレイビーチ国際選手権でATPツアー初優勝。同年8月の全米オープンでは、日本男子シングルスとして71年ぶりにベスト16進出という快挙を果たし、その年のATPワールドツアー最優秀新人賞を受賞。2012年の全豪オープンでベスト8に進出し、世界ランキング20位に到達。日本代表として臨んだロンドン五輪では、準々決勝まで進み、5位入賞。2014年には全米オープンでランキング上位選手を次々と破り、決勝に進出。アジア人としては初となるグランドスラム準優勝という快挙を成し遂げた。

